

1. みんなでつくろうケアプラン ～LIFE や R4 を理解してケアプランを協働で作り上げる仕組み～

高石市立老人保健施設きやらの郷
介護支援専門員 山崎さやか（やまさき さやか）

【はじめに】

当施設では基本の書式をアレンジしたオリジナルのケアプラン書式を8年間活用してきたが、利用者の情報共有方法が機能せず、プラン作成時の一担当者の負担も大きかった。また I C では業務時間中の時間の捻出が難しく、主介護者への説明の遅延等もあり管理が難しくなっていた。

令和3年の介護保険制度改正による LIFE 加算や、他施設から R4 システムの評判等を聞き、当施設が抱えていた問題解決の糸口になると感じシステムの導入に向けて舵を切った。しかし、周辺の施設では LIFE や R4 の入力作業は施設ケアマネや相談員が行っている施設が多いが、両職種の負担が増える事も考慮し、現場の協力を得て各専門職と協働出来ないか検討していく事となった。

【目的・方法】

LIFE 算定やケアプラン作成において、全専門職が取り組む事により専門性を反映できる。

① LIFE の算定においては各専門職を配置した委員会を立ち上げ、LIFE について学び加算取得を軌道に乗せることを目標とした。

② LIFE 委員主導で勉強会を実施し、加算の概要や P C の入力方法、各職種の役割分担について周知した。全職員が必ず1回は研修に参加できるようにシフト調整を行い、LIFE を理解できるまでは委員が主導で指導を行った。

③ R4 システムについてもまずは LIFE 委員会内で勉強会を行った。従来のケース担当はチーム制（全専門職参加）へ変更し、チームでケアプランの作成に関わるようにした。また初回プランの説明は各専門職が参加することを義務付け、利用者へ具体的でより専門的な説明が出来るようにした。

【結果】

①令和3年4月より科学的介護推進体制加算、令和4年4月に自立支援促進加算の算定を開始する事が出来た。②各専門職がケアプラン完成までのプロセスに関わる事で、その内容を全職種で共有出来、かつ各専門職が家族へ具体的に説明する事で計画書の意図を的確に伝える事が出来るようになった。

【考察および今後の課題】

LIFE の自立支援促進加算の理解には現在も個々でばらつきがあり、研修会等を重ねて周知していく必要がある。また、感染症対策等により施設内の活動が制限される時もあり、寝たきり防止の取り組みについても様々な課題を残している。しかし、LIFE の入力を協働で行う事で、各専門職が寝たきり防止の視点をプランに反映する事を意識出来るようになったのは収穫であった。また、R4 は情報共有においてはとても便利なツールではあるが、情報入力に時間がかかる事や、ケース検討会や評価等を行う時間がなかなか取れない課題は残っている。今後の更なる業務改善により検討会議時間の捻出や、R4 システムの更なる活用を見出していきたい。